

研究・調査報告書

報告書番号	担当
479	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Comparison of outcomes among moderate alcohol drinkers before acute myocardial infarction to effect of continued versus discontinuing alcohol intake after the infarct. 中程度の飲酒をしている者が、急性心筋梗塞梗塞を起こした後に、禁酒した場合と飲み続けた場合の結果の比較。	
執筆者	
Carter MD, Lee JH, Buchanan DM, Peterson ED, Tang F, Reid KJ, Spertus JA, Valtos J, O'Keefe JH.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Cardiol. 2010 Jun 15;105(12):1651-4. Epub 2010 Apr 24.	
キーワード	
飲酒、適量飲酒、心筋梗塞、死亡率、健康状態、予後、アルコール	
要 旨	
<p>背景： 少量～中等量の飲酒は、以前は急性心筋梗塞（AMI）発症や死亡のリスクの低下と関連付けられていた。心筋梗塞後に飲酒習慣を変えた時、健康状態の長期予後がどうなるかは明らかでない。</p> <p>方法： 世界保健機関（WHO）の飲酒障害識別テストで評価された、AMI 患者による前向きコホート研究を用い、AMI 発症時の飲酒量が適量だったと答えた患者 325 人の飲酒パターンの変化を調べた。AMI 発症一年後に、飲酒量、病気関連（狭心症についてや生活の質：QOL について）の健康状態、一般的な（精神的、肉体的な）健康状態や再入院の有無を調べ、さらに 3 年後に死亡率を評価した。サイト内で「シアトル狭心症アンケート：狭心症頻度と QOL、12 のショートフォームによる精神的・肉体的要素概要スケール」を用い、多変数の階層線形モデルを使用し解析した。</p> <p>結果： ベースラインでは適量飲酒であった飲酒者 325 人は、273 人（84%）が 1 年後も同量を飲み続けており、52 人（16%）が飲酒をやめていた。完全に調整したモデルでは、フォローアップ時にも飲酒し続けていた人で「肉体要素スケールスコア」（β : 6.47、95%信頼区間 : 3.73-9.21、$p < 0.01$）が有意に高かった。適度な飲酒を続けていた者は禁酒者に比べ、より狭心症の傾向が低く（相対危険度 : 0.65、95%信頼区間 : 0.39-1.10、$p < 0.01$）、再入院率も低く（相対危険度 : 0.79、95%信頼区間 : 0.77-1.41、$p < 0.42$）、3 年間死亡率も低く（相対危険度 0.75、95%信頼区間 : 0.23- 0.51、$p = 0.64$）、特定疾患後の QOL もよく（シアトル狭心症アンケートによる QOL、β : 3.88、95%信頼区間 : -0.79～8.55、$p = 0.10$）、精神状態もよかった（精神要素スケール、β : 0.83、95%信頼区間 : -1.62～3.27、$p = 0.51$）。</p> <p>結論： 結論として、こうしたデータより適度な量の飲酒をしていた者が、AMI 後に同量飲酒を継続しても副作用がないこと、肉体機能も AMI 後に禁酒する者に比べ、よりよいことが示唆された。</p>	